



愛知淑徳大学

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第19号

発行年月日：2005年3月15日
 〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9
 Phone 0561-62-4111 EX 498
 FAX 0561-63-9308
 E-mail : igws @ asu.aasa.ac.jp

IGWS第19号ニュースレターの目次

ジェンダー・女性学研究所主催第13回定例セミナー「セクシュアリティの多様性について考える」……	1
第13回定例セミナー参加感想文……	3
女性への暴力防止のための護身術との出会い……	4
ジェンダー、されどジェンダー……	5
ドイツ生涯学習にみる国際協力……	6
学園創立100周年・ジェンダー・女性学研究所開所10周年記念講演のお知らせ……	7
2005年(H17)度前・後期ジェンダー・女性学関連の授業開放講座……	8

ジェンダー・女性学研究所第13回定例セミナーとして、2004年12月2日（星が丘キャンパス）及び12月16日（長久手キャンパス）に、学術講演会「セクシュアリティの多様性について考える」を開催したのでその概要を報告する。

長久手・星が丘
両キャンパス

セミナー

講師 日高 庸晴（京都大学大学院医学研究科客員研究員）

「セクシュアリティの多様性について考える」

セクシュアリティ (sexuality) は、それに隣接した構成概念であるセックス (sex)、ジェンダー (gender) と同様、私たち一人一人が人間として社会的生活を営んでいく上できりもみはなせない重要な概念ではないかと思われる。しかしながらわが国において、オープンな場においてセクシュアリティについて積極的な議論をすることが未だ忌避されていることも否めない。そしてそのことが若年層のセクシュアリティに対する理解を深める機会を奪っているといっても過言ではないだろう。それゆえセクシュアリティとは何かを把握した上で、セクシュアリティが私たち人間にとって持つ意味、セクシュアリティの多様性を理解することの重要性を考えることを主たる目的として本講演会が企画・開催された。

セクシュアリティは非常に広範な概念で、そこで問題とされる 이슈 も多種多様であるが、今回はセクシュアリティについて具体的理解を深める契機として、「ゲイ・バイセクシュアル (同性愛・両性愛) 男性」の問題を取り上げた。今回講師として招聘したの

は京都大学大学院医学研究科客員研究員の日高庸晴先生であった。日高氏のご専門は社会医学・公衆衛生学・健康心理学であり、京都大学大学院在籍中よりカリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部エイズ予防研究センターに研究員として勤務し、People of Color のための健康プロジェクトに参画し、男性から女性へのトランスジェンダーやアジア系ゲイ男性、日本人旅行者や留学生、在米日本人HIV陽性者の健康問題やメンタルヘルスの実態を明らかにする調査研究に従事された。また国内では「厚生労働省HIV感染症の疫学研究班」並びに「厚生労働省HIV感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究班」の研究班員としても活躍してこられた、この分野を名実共に代表する若手研究者の一人である。今回は日高氏が行った豊富な実証研究のデータに基づき、ゲイ・バイセクシュアル男性の置かれている社会的環境や現状についてご講演頂いた。

前半では、ゲイ・バイセクシュアル男性が思春期において経験した様々なライフ・イベントやメンタルへ

ルスの実態を、インターネット・サーベイを用いて明らかにした研究が報告された。研究の結果、調査対象者の約9割が学校教育の現場において教師から同性愛に関して不適切な対応あるいは情報提供を受けてきたことが明らかにされた。また全体の8割以上が思春期に何らかのいじめ被害にあっており、その中でも約6割は「ホモ」「おかま」「おとこおんな」といった言語的暴力を伴ったいじめ被害を経験していたことが明らかにされた。同時に思春期におけるこうしたストレスフルな状況により、自殺を考えた人が6割強にも上ること、更には自殺未遂を行った経験率が15%にも上がることが報告された。一方でメンタルヘルスの実態については、同性愛・両性愛への偏見と差別がある現在の日本社会において、日常的に「異性愛者」を装わざるをえないゲイ・バイセクシュアル男性にとって、「異性愛者」役割を担うことによる心理的葛藤（異性愛者の役割葛藤）やそうしたストレスが、セルフ・エスティーム（自尊感情・自尊心）の低さや孤独感、先の見通しのつかない不安や抑鬱などの心理変数と有意な関連性があることが示された。ゲイ・バイセクシュアル男性が思春期において深刻ないじめ被害を経験していたこと、そうしたいじめ被害の背後にはセクシュアリティの問題が深く関与していたこと、更には年齢階級別にみると特に10代・20代の若い世代が全般的にメンタルヘルスを悪化させていたことを鑑みると、本講演で報告されたエビデンスから中学や高校における学校教育の現場において同性愛・両性愛に関する正しい情報提供と適切な対応が必要不可欠であるとの示唆が得られよう。

後半では、ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスの実態とHIV予防行動（コンドーム使用行動）の関連性を、スノーボール・サンプリング法を用いて検討した研究が報告された。主に北米で行われた数々の研究で、セルフ・エスティームといった心理変数とセィファー・セックスの実行の関連性は見出されており、HIV/AIDS予防対策の文脈からもこの関係に着目することは重要であると思われる。調査の結果、リスクな性行動（コンドームを使用しない性行動）を行うグループは、コンドームを使用した性行動を行うグループに比して、メンタルヘルスは悪化しており、セルフ・エスティームも低く、孤独感も有意に高かった



12月2日 星が丘キャンパス

ことが報告された。すなわち分析によりHIV感染リスク行動の背景的要因として、メンタルヘルス、心理的要因が深く関与していることが実証されたのである。この結果は、HIV/AIDSの予防啓発、予防介入を行うにあたり、適切な予防情報の提供のみならず、ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスを良好に保ち、セルフ・エスティームを高め、孤独感の軽減を図る臨床心理学的援助を含めた啓発、介入活動の必要性を示唆するものといえる。

わが国におけるゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスの実態、およびメンタルヘルスとHIVリスク行動の関連性は日高氏が一連の行動疫学調査を行うまで全く明らかにされておらず、その意味でも今回講演された内容は学術的・社会的観点から考えて非常に貴重なものであろう。同時に日高氏の研究は、性教育・思春期保健を扱う学校教育・学校保健及び今後のHIV予防啓発・予防介入活動に対して建設的提言、有益な示唆を与える点で極めて重要な意味をもつものと考えられる。

講演会に参加した学生からは「ゲイ・バイセクシュアル男性への差別がこれほどまでも激しいとは全く知らなかった」という意見が多数寄せられた。これまで全く意識してこなかったセクシュアリティの問題を提起され、それについて深く考える時間を設けることができた本講演会は非常に意義深いものであったと思われる。講演会では主たるテーマとして扱われなかったが、ゲイ・バイセクシュアル男性の問題以外にも、レズビアン女性、バイセクシュアル女性、更には性同一性障害などセクシュアリティに関する問題は山積しているのが現状である。大学教育の現場でセクシュアリティに関する様々な問題を提起し、いかにして適切な教育啓発を行っていくかは今後の課題であるが、少なくとも今回のような講演会を定期的に行い、学生と教員が共に考える場を積極的に設けることが重要ではないかと考えた。

（文責IGWS運営委員 西 和久）

同セミナーの報告書を発行しました。希望者は本研究所へお問い合わせ下さい。



12月16日 長久手キャンパス

第13回定例セミナー 参加感想文

加藤みわ子

「同性愛」という用語がDSMから削除されたのは1987年のことだという。つまり、同性愛を疾患として扱わなくなったのは、ごく最近のことなのだ。学部で基礎医学を学んだ私は、その事実を認識していなかった。そして、認識していなかったことに内心驚いていた。更に、今回の日高先生のご講演では、とりわけ同性愛男性に焦点を当てられていたのだが、冒頭で「性のグラデーション」として性の多様性についての解説があり、その中では“インターセックス”についての解説もなされた。私はインターセックスという用語は知っていた。遺伝子による表現型も知っている。けれど、医療現場で彼らに接する機会があるだろう医療に従事する私たちですら、それ以上の知識を知らされず、そして知らないことを問題とも感じてこなかったのだ。その事実には、私は愕然となった。

AIDSは80年代当初、特に同性愛男性において問題とされた疾患である。周知の通り、HIV感染からの自己防衛にはコンドームの使用が欠かせない。しかし、実際はなかなか使用の徹底が難しいようである。そして講演では、AIDSという生命を脅かす病からの自己防衛を遠ざける原因の一つとして、不安特性の高さ、自尊心の低さ、孤独感の強さが挙げられた。それには、

性的嗜好からの学齢期の被いじめ体験が陰を落としていいる。そして、そこには日本のセクシュアリティにおける学校教育の不在がある、とのことであった。医学の教育現場でもこの不在は深刻であると私は思う。「性の教育の不在」の背景には、禁忌を見て見ぬ振りをする我が国の社会特性があるのかもしれない。今回私は、日高先生の「性には寛容」と言われている我が国において、実は“見えていないだけ”で“存在していない”訳ではない。」との話に驚く学生たちの姿を目の当たりにした。本当に、見えなければ存在しないと思う人々が少なからずいることは衝撃的だった。それも、自分も含め、こんなに身近に！

日高グループの調査において、一回に30分以上も掛かるアンケートにも拘わらず、欠損値が殆どなかったとの報告に、参加当事者たちの真剣さ、またセクシュアリティ研究の緊急性と必要性を強く感じた。そして、日高グループの参加者を思いやる姿勢に、研究者としてあるべき姿を垣間見た気がして、心を打たれた。

性の問題は社会全体の問題であり、そのまま生命の問題なのだ。貴重なご講演を戴いたと思う。日高庸晴先生に心より感謝申し上げます。

本学コミュニケーション研究科 大学院生

中川 翔平

今回の日高庸晴先生による講演は、ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスの実態を実証研究によるデータを基にして行われました。

セクシュアリティとは性的志向を意味する言葉である。私も含め多くの方が、僕は男だから女性が好き、私は女だから男性が好きと当たり前前に考えていると思います。しかし、現実には異性愛、両性愛、同性愛、無性愛と多様なセクシュアリティを持つ人たちによって私たちの生活する社会は構成されています。

講演によると、ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルス悪化の要因は異性愛者的役割葛藤、抑鬱、特性不安（生理現象をともなった漠然とした怖れ）、セルフエスティーム（自尊感情・自尊心）、孤独感、自己抑圧的行動特性にある。同性愛に対する偏見を避けるに異性愛的役割を演じる葛藤からのストレスや苦痛は、その他の要因にも影響を与え、特にセルフエスティームとの関係では有意に高い。また調査対象の7割近くが強い特性不安を抱えており、全体の5割近くが抑鬱状態であり、孤独感も一般集団と比較して高い傾向がある。また、全体の64%がこれまでに自殺念慮や15%が自殺未遂の経験が有り、セクシュアリティに関わる自殺未遂は、そのうちの6.4%であった。また全体の約60%がセクシュアリティに関わる言葉のいじめ被害を経験しており、言葉以外の一般的ないじめ被害

害を82%が経験している。別のデータから、アメリカでは、ゲイ、レズビアン、バイセクシュアルなど同性愛者で凶器による脅迫を受けた経験が30%いることがわかった。

上述のように異性愛が当たり前と考えている人が多いため、同性愛者に対する偏見や差別は非常に強くアメリカなどの諸外国では、同性愛を理由に暴行事件や殺人事件なども起きている。そのためゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスは悪化し、そのことがHIVやその他STDの感染リスクの高い行動やいじめ被害、抑鬱、セルフエスティームの低さからの自殺や自傷行為の増加の背景となっている。学校教育の場で性に関する教育はほとんど行われていないこと、性の多様性を否定的に捉える社会や道徳観・価値観が、偏見や差別を産んでいる。同性愛者の多くは自分本来の姿を隠し、生き方を狭めるしかない状態にしている。性的指向は自由として認められ、尊重されるものである。今度私たちは、セクシュアルマイノリティの現状を知り、セクシュアリティの多様性を認識する必要がある。そのためにはセクシュアリティまたは性に関する適切な教育が行われる必要がある。

今回の講演は、多様化する社会の中で様々なバックグラウンドを持つ人々とどのように関わっていくかを考えるきっかけとなったと思う。

本学エクステンションセンター・聴講生

女性への暴力防止のための護身術との出会い

～オレゴン大学留学体験から～

松尾 奈々

1998年から2002年まで、私は米国オレゴン州で留学生活を送った。オレゴン大学工学部から移籍するなどの経緯をへて、オレゴン大学人文学系女性・ジェンダー学科 (University of Oregon, College of Arts and Sciences, Women and Gender Studies) に編入学し2つ目の学士を取得し帰国した。

オレゴン大学で、最初に履修した授業は「女性・ジェンダー学入門 (Introduction to Women's and Gender Studies)」だったが全てのトピックに深く感銘を受けた。それまで「女性・ジェンダー学」の存在さえ知らなかった私が、その学問に深い関心を持つようになるのにさほど時間はかからなかった。なかでも女性に対する暴力については、特に関心のもてるトピックだったため強く影響を受けた。在学中には、卒業選択必修科目としてインターンシップの授業を選択し、私はドメスティック・バイオレンス (以下DV) のサバイバーを支援する大学近辺のNPOで電話相談やシェルターでの業務に関わった。大学の授業において暴力の実態を知った私は、その現実を電話相談やシェルターでの業務を通して生体験し、この社会に対して強い憤りを感じた。そして、それ以上にその暴力に対する無力感と恐怖感を強く感じ、そのインターンシップを続けることに迷いを感じ始めた。

ちょうどその頃、大学で「女性のための護身術 (Women's Self-defense)」という授業を履修し始めた。この授業を履修した友人たちが「人生が変わった」と言っていたため、入学直後から強い関心を持っていた。そして、実際に履修をして友人たちの言葉の意味が分かった。授業で学ぶ護身術は、「身体的な技 (キックやパンチなど)」のみを伝達するような既存の護身術とは全く違い、既に自分たちが持っている力や知恵を工夫することで、多様な犯罪被害を軽減させる技を学ぶ。多様な犯罪被害の段階となるのは大きく分けて、1) 身体に危害を加えられる前段階、2) 危害を加えられた瞬間、3) 危害を加えられた後の事の3つである。「危害を加えられた後」というのは事件関

係者や友人、家族、または自分自身によって行われる2次被害の段階のことである。授業の前半は講義・話し合い・ロールプレイなどを行い、後半は前半で学ぶ精神的な力が基本となった身体的護身術を学ぶ。私は大学で、このように体系だった方法論として暴力防止の護身術理論が確立されていることを学び、この講座を受けることによって学生の自己肯定感が向上し、友人や恋人、家族とのコミュニケーションも円滑に行えるようになったと統計結果が出ている事も知った。

この講座を履修する前、暴力の実態を知った私は、その力にただ怯えていたが、この護身術と出会ったことによって、その現実を認識しながらも自らの可能性を認知・信頼し、自分や社会に対して暴力根絶への一筋の道を見いだすことができた。履修後「自分にも何かできるはずだ」と確信した私は、反・暴力の運動に再び関わるようになり、インターンシップでの仕事も現場でサバイバー達と直接接触することから、その地域にはなかった日本語のDV防止啓発冊子の作成へ取り組むことに転じた。

日頃から日本の女性問題に関する情報不足を感じていた私は卒業後に帰国し、愛知淑徳大学のジェンダー論講座を聴講したり、他大学のジェンダー研究会が行う勉強会に参加しながら半年間過ごし、2003年4月に愛知淑徳大学・大学院に入学した。幸運なことに入学後は、理論も実践も一度に経験することができた。同じ年の4月から地元の男女共同参画センターに臨時職員としての就職が決まり、同年夏頃からは女性に対する暴力の問題を扱うNPOでのアルバイトも決まった。そして、修士論文に取り組み始めた去年、知識を更に深めようと思い大学院を半年間休学してオレゴンに戻り護身術の授業を再受講し「女性のための護身術」の重要性を再認識した。その経緯を踏まえ現在研究に励んでいる。今後は研究を継続しつつ、ワークショップを開くなど現場での活動も増やしていきたいと思っている。

(本学コミュニケーション研究科 大学院生)

ジェンダー、されどジェンダー

皆川 修吾

私は幼少の頃、兄とは年の差があったせい、年の近い三人姉妹に囲まれて、可愛がられ、甘え、苛められ、妬まれ、ときには喧嘩して、育った次男坊である。そのせい、男子校に行ったにもかかわらず、生理的な性差は若いときから理解していたし、女性の気持ちもなんとか推し量ることが出来ると思っていた。ところが、大人になって結婚し、子供が出来るやいなや、性格の不一致が理由で離婚してしまった。その後、父子家庭の親として、ときには父親役を、またあるときは母親役をやり、そして子の遊び友達となり、気がついてみると、一人娘の子が今は子供の母親となり、私はお爺さんである。私同様多くの方が人生の半分以上の時間を、ただ単に男女間の関係に留まらず、家族という一つの社会体の一員として過ごしているに違いない。

文創学部多元文化専攻での私のゼミは「グローバル政治社会創成にむけて」を課題にしている。卒論の課題として毎年ゼミ生の何人かは政治学的視点からジェンダー問題をテーマに選択している。今年の私のゼミ生の卒論の中にアフリカ諸国で社会的慣行になっている女子の割礼問題をテーマにした論文があった。これなどはジェンダー研究の格好の課題であろうと思われるが、これら地域では、この慣行が宗教、伝統、伝承などと関連して社会に深く根付いており、人間の尊厳を重視するNGO諸団体の真摯な努力にもかかわらず、改善のスピードは緩慢であることがわかった。同時に、このような問題は、文化相対主義を主張する文化人類学者らにとって少なからずディレンマとなっているようである。

ジェンダー研究をテーマにしたもう一つの今年の卒論のなかに、日本での女性の就業問題をとりあげていた。日本女性のM字型就業率について統計資料を駆使して分析し、またスウェーデンとの比較研究で日本の制度的格差を検討し、日本は外圧による法的整備をしてきてはいるが、運用面でスウェーデンと比べかなりの後れがあることを指摘していた。日本での雇用面の男女平等に関する社会一般の意識変化は、アフリカでの女子割礼同様、非常に緩慢であることがこの研究からみてとれた。

私は政治学者である、と胸を張って言いたいところだが、自信を持って言いきれない。おそらくその理由は社会変動をみるたびに政治理論が塗り替えられてきたからであろう。社会主義体制研究に40年近く励んできた者にとって、ソ連邦崩壊は衝撃に近かった。私が直面したのは研究対象や研究アプローチの変更だけでなく自分自信の信条までも再調整しなければならず、

自分の今までやってきたことが歴気楼の社会を対象にしてきたのではないかとさえ思うときがあった。その後、グローバル化が急速に進み、ジェンダー、環境、人口、貧困、感染症、テロ、国際組織犯罪など現代社会の諸問題が争点化していった。しかし、この世界がグローバル化、すなわち相互依存の輪が広がれば広がるほど、錯綜する利害の調整に迫られ、争点間を連携した調整メカニズムが必要なことが分かってきた。つまり、われわれはグローバル・スタンダードおよびグローバル・ガバナンス構築の時代にいるということである。ただ、国内外の政治システムがこれら変容に対応できず、最近では「ほころび」が目立ってきている。とくに、日本の場合、93年に55年体制が崩壊して以来、無党派層が急激に増え、なんと95年には有権者の50%近くになり、それ以後も増え続けている。無党派層の増加は必ずしも政治的無関心層の増加を意味しておらず、単に意味ある政策提言をする政党が不在なこと、そして有権者と政党間の価値観のズレが生じていることであるが、同時に、有権者の価値観が多様化・多元化していることを示唆している。今後、人間が英知をふりしぼり、どのように政治システムを再構築していくか定かでないが、いずれの争点にも対処すべきキーワードは教育水準、権力、価値観だと私自身は心得ている。長期的に見て必要なのは、国民の判断能力を涵養できる高等教育であり、その理想的姿勢は複眼的多元文化型指向の教育であろう。多様化した利害関係の調整は権力と権威を備えた政治機構がするわけであるが、現行の行政府・立法府とも民主化も含めかなりのオーバーホールを必要としている。異文化間で広く共有できる文化的価値観は異文化間の交流があってはじめて相互理解しあえるのであって、意識変化は当然利害関係の調整プロセスを避けて通れない。そこでは理念を背景として作動する権力機構を必要としている。グローバル化と一口に言っても、国内外を問わず、その進展度は地域的・時間的な格差があり、非常にまだら模様である。したがって、机上の空論に終わらせないためにも、研究者は今まで以上に社会科学的な実態調査を必要とし、本学の国際交流研究科などはその方向で貢献できればと思っている。

以上、私なりに的を絞りきれないジェンダーのとらえ方、およびジェンダー研究の位置付けを試みてみたが、これはあくまでも私個人の意見であり、国際交流研究科長としての意見でないことをおことわりしておきたい。

(本学文化創造研究科長・文化創造学部 教授)

◆◆◆ドイツ生涯学習にみる国際協力◆◆◆

國信 潤子

2004年12月にドイツ、スウェーデンの生涯学習領域の国際協力の実態調査を実施した。これはユネスコ・アジア文化センターおよび国立教育政策研究所による共同調査プロジェクトである。日本の国際協力がハード（建築物など）およびそれに付随する技術移転協力重視であったことから、近年教育全般への支援が重要視されるようになってきている。

私はここ12年ほどアジア・南太平洋成人教育協議会：Asian South Pacific Bureau of Adult Education, ASPBAE)の理事として成人教育、社会教育の分野で活動してきた。特にジェンダー領域であり、女性のエンパワーメントのための教育に関わってきた。

今回の調査で非常に感銘を受けたのはドイツにおける成人教育の国際協力のあり方である。国際協力省、外務省、国際技術協力庁、そのほか大学、国立の教育研究機関なども訪問したが、なかでもボンにあるドイツ成人教育協会・教育国際協力研究所（International Institute for Educational Cooperation/Deutscher Volkshochschulverband：以下IIZ/DVVと記す）の活動である。ドイツは第二次世界大戦敗北後、帝国主義、独裁国家、ユダヤ人の大量虐殺などを反省し、長年にわたる賠償を継続している。戦後復興の際、こうした過ちを二度と繰り返さないためにも平和目的の国際協力をただちに技術のみならず、教育、民主主義、平和構築の領域でも1950年代から開始している。

今回の調査団が訪問したいいくつかの成人教育国際協力機関のなかでもこの機関は国内の200年に及ぶ自主的学習活動：フォルクス・ホッホ・シューレ（国民学校）の伝統を大切に育てつつ、地域に密着した生涯学習の経験を積んでいる。さらに1960年代より国際教育協力を世界各国に民間組織支援という形で実現している。1962年にDVVが活動開始、1978年にIIZが発足となっている。その国際教育協力の方法がたいへん個人的で、かつ個人の主体性を重視した生涯学習手法を開発している。領域は貧困撲滅、民主主義支援、草の根の最も教育機会のない人々への教育機会援助、働く子どもたちのための学習機会開設、女性の自立支援、紛争地区における人権擁護、保健学習、HIV/AIDS防止学習などの広範にわたる。

Volkshochschuleは日本で言う公民館活動のようなものである。ドイツ国内では老若男女がかかわりなくVHS（公民館のような場所）で語学、パソコン教室から手芸、料理にいたるまで、考えられる限りの成人教育（社会教育・生涯学習）が受講でき、国、州、市などからの援助と個人の一部費用負担でどこでも、いつからでも、なんでも学習できるようになっている。これだけならば日本にもそのような社会教育のシステムはあり、公民館、生涯学習センターなどで学習可能であるように思える。

しかしドイツと日本の顕著な違いは、この生涯学習においてドイツは世界的支援体制を過去40年ほど展開しているということである。しかもそれはドイツ的な価値を浸透させるためではなく、異なる地域、民衆のニーズを理解し、最優先するシステムを現地の人々の主導のもとに実施するという支援方法を実践していることである。

先に紹介した私が10年ほど活動しているASPBAEにおいてIIZ/DVVは、30年以上にわたる主要な支援団体である。多いときで年間6000万円ほどの援助を継続的に20年間にもわたってしている。そして私も理事の一人として活動してきたので、予算・企画立案などにもかかわってきたが、IIZ/DVVは一切口をださないのである。ASPBAEはアジア・太平洋地区のもっとも周縁化された人々、特に女性の教育には多くの経験を積んでおり、ドイツの支援が常にあった。識字教育、自立のための職業教育、子育て、保健などの実践的教室の開催、それも既婚女性が農業など労働に追われるなか、日中に学習機会をつくっても参加できないときには夜、女性のトレーナーが既婚女性の都合のよい場所、ときには個人の家にろうそくと紙、鉛筆などを持参で訪問教育をするなどして、地域ごとのニーズにあった学習機会の開発をしてきた。それも現地の民間教育リーダーとパートナーシップを形成しつつ実施している。私は支援される組織の側においてその実態を体験してきた。しかも若いドイツ青年男女が地域にすっかりなじんで3～5年間生活しつつ、対話のなかからそうした関係を形成していることも目撃した。

振り返って、日本はというと、世界の経済大国として経済活動は顕著であるが、教育における国際協力、それも草の根の人々にまで届く教育支援となると未だ不十分なことしかできていない。近年JICAも文部科学省も社会教育、生涯学習領域における国際協力を目を向け始めた。すばらしいことである。しかし用心が必要である。とかく日本の経済成長至上主義でアフリカ、ラテン・アメリカ、アジア諸国などを支援すると、たいへんな抵抗が先方の地域、住民からくることがある。つまり、また日本製品を売りにきたのが、日本的性差別文化を輸出しようとするのか、あるいは日本人のみが管理的地位につく事業を強制するのか、などという拒絶反応はしばしばみられた。このようなことのないように協力活動をする現地の文化、人々の暮らしを十分理解し、現地になじんで生活、観察することがまず大切である。その上での協力事業である。長期的視野にたった文化理解なしには成人教育領域の国際協力体制は望めない。IIZ/DVVが30年間継続した草の根の人々のエンパワーメントのための成人学習国際支援体制を垣間見たことは有用であった。

（本学ビジネス学部 教授）

学園創立100周年・大学開学30周年記念講演
開所10周年ジェンダー・女性学研究所記念講演

主催ジェンダー・女性学研究所

ジェンダー・女性学研究所は、1995年の開所から10年目を迎えました。学園100周年記念とあわせて、「映画表象とジェンダー」をテーマに、下記のような記念企画を実施します。

映画は「写真花嫁」としてカナダに渡った日本女性を描いたドキュメンタリーです。映画と製作者である女性監督の話を通じて、日本女性史の一端を知るとともに、表象・メディアとジェンダーについて考えてみたいと思います。多くの皆様のご参加をお待ちしています。



ドキュメンタリー映画「おばあちゃんのガーデン」上映

この映画は、監督であるリンダ・オーハマの祖母であるアサヨの、「花婿を写真でしか見たことのない花嫁」としてカナダに到着して以降の波乱の人生を描いたドキュメンタリーです。美しく描かれた劇的な出来事に、思い出と感情、映像と音声巧みに織り交ぜられ、見るものを圧倒する作品になっています。

場 所：星が丘キャンパス

日 時：平成17年7月12日（火）

第1部：15時～17時半 映画上映及び監督の講演通訳付

第2部：18時～19時半 監督と高野史枝氏（フリーライター）とのトーク通訳付



監督：リンダ・オーハマ氏

日系カナダ人、バンクーバー在住のビジュアル・アーティスト、ドキュメンタリー映画作成者として多くの賞を授賞

参加対象者：学生・教職員、一般市民、・・・200名

この映画の上映はカナダ国立映画制作庁の協力を得て行っています。

入場無料、但し第2部は事前申し込みが必要・・・50名

問合せ先：

愛知淑徳大学 ジェンダー・女性学研究所 〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9

TEL：0561-62-4111 内線498 FAX：0561-63-9308 e-mail:igws@asu.aasa.ac.jp

担当 山田清美

公共交通機関をご利用の上お出かけください。愛知淑徳大学 星が丘キャンパス

所在地：名古屋千種区桜ヶ丘23番地 電話：052-781-1151（代）

学園創立100周年・大学開学30周年記念講演 ビジネス学部主催

講師：坂東真理子氏

元内閣府 男女共同参画局局长・元埼玉県副知事

昭和女子大学教授

企画名：「ビジネス界における男女共同参画とは」

開催場所：長久手キャンパス

開催日時：平成17年7月13日（水）13：30～16：00

企画のねらい：ビジネス界において男女が共に意思決定に参画できる関係を形成するために配慮すべきこと、及びビジネスにおける男女共同参画状況の国際情勢を学ぶ。

参加対象者：本学学生・教職員・一般市民、200名

無料

問合せ先：愛知淑徳大学 ビジネス学部 内線390

TEL：0561-62-4111 内線498 FAX：0561-63-9308 e-mail:igws@asu.aasa.ac.jp

講演、質疑応答および懇談会、お茶あり

21世紀の今、ASUのジェンダー論、女性学・男性学がさらに面白い!!(一般の人にも受講できます) 2005年度前・後期

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

ジェンダーと社会

星が丘 前期 木曜4限

講師 / 北仲千里

【授業の概要】

男らしさ、女らしさは最近大きく変わってきています。しかし、現在でも人生の始まりから最後まで、雨が降った時や傘の色からくしゃみの大きさまで、その人の性別によって大きな違いが出てしまうことも事実です。また、男女の差異と平等は、今日大きな社会問題にもなっています。この講義では、社会学的な見方をベースに「男であること、女であること」や家族、そしてセクシュアリティにまつわるテーマを考えていきます。

【授業計画】

まず最初にジェンダーという考え方についてとりあげます。そのことと家族に関するテーマは深く関係しています。また性別の問題と性(セクシュアリティ)の問題は、深く関わり合い、私たちの心のどこか深い部分、自己意識にまで影響を及ぼしているといえるかもしれません。そうしたテーマをビデオを見たり、統計で確かめたり、新聞を読んだりしながら2~3週ずつ取り上げていきます。

テーマ1 ジェンダーとは何か

「ジェンダー」概念1 身体の違いとジェンダー
「ジェンダー」概念2 「差別」と「区別」

テーマ2 ジェンダーと結婚・家族

(1)「専業主婦」の社会学
(2)結婚と社会

(3)家庭の中のジェンダー

(4)家族をめぐる社会問題

テーマ3 働くこと、働かないこととジェンダー

(1)男女の賃金と働き方

(2)家事労働と職業労働

テーマ4 セクシュアリティの社会学

(1)性の規範とジェンダー

(2)レイプやストーカー犯罪と社会

(3)セクシュアル・ハラスメント

(4)同性愛は異常かそれとも純粋な愛か

【評価方法】

講義中に数回行うミニレポートと、期末の試験との両方で評価します。

単なる「出席点」というのではありません。

期末試験の際は、持ち込み自由とします。

【テキスト】

教科書は指定しません。毎回プリントを配布します。

【参考文献・資料】

女性学・男性学~ジェンダー論入門~(伊藤公雄・國信潤子著 有斐閣)

新訂 ジェンダーの社会学(江原由美子・山田昌弘著 放送大学テキスト)

ジェンダーと社会

長久手 前・後期 金曜4限

講師 / 國信潤子、生江明、星山幸子、佐藤光、林かぐみ

【授業の概要】

この講義は、まずジェンダーとは何かについて解説し、それらが日本社会において、また開発途上国においてどのように現象化しているかを紹介するオムニバス講座である。5名の開発協力の現場で活躍する講師によって日本、フィリピン、トルコ、パングラデシュ、ネパールなどでの現場の開発協力活動を基礎にジェンダー関係の多様性と開発協力におけるジェンダーに敏感な視点とは何かを紹介する。

持続可能な開発、基本的な生活ニーズの確保、参加型開発、地域住民の意識化など、近年の開発論の理論的展開をもとにジェンダー関係の変容を考察する。

【授業計画】

まず、本講座のコーディネーターである國信(本学教授)がジェンダーとは何か、日本社会におけるジェンダー関係の実態、国際開発におけるジェンダー視点の展開について講じる。次に生江明(日本福祉大学教授)による国際統計にみるジェンダー格差の意味を参加型小グループ討議で読み取り、発表、討議する。第三番目の講師は星山幸子(金城学院大学講師)によってトルコ南東部アナトリア地方の綿摘み女性労働者の生活実態とイスラム農村社会にみるジェンダー規範を紹介する。第四番目

の講師はアジア保健研修所(AHI)の佐藤光医師および、林かぐみ研究員によって愛知県日進市にある国際的なNGOであるAHIの活動、つまりアジア諸国で実施されている保健リーダーの参加型学習による医療・保健、ジェンダー平等化の促進活動を紹介する。

各講師が3~4回ずつ講義を行うリレー講義である。大半は講義形式である。必要に応じて、小グループ討議、ビデオ視聴なども取り入れる。

【評価方法】

期末のレポート、出席状況、履修態度、感想カード内容などの総合評価による。

【テキスト】

資料配布

【参考文献・資料】

開発とジェンダー(田中他 国際開発事業団出版 2001年)

ジェンダーと社会

星が丘 中・後期 火曜4・5限 水曜2限

講師 / 中島美幸、山下智恵子

【授業の概要】

ジェンダーの観点から文学作品を分析することによって、<女/>の規範がどのようにテキストにおりこまれているかを読み解き、さらにテキストがどれほど現実の女と男の生と性を規定してきたかを検証する。

(中島美幸兼任講師)「女性の表現」の観点から日本文学を歴史的に跡づける。特に近代以降の女性表現については外国の女性文学と比較しつつ読み解いていく。

(山下智恵子兼任講師)現代の文学作品を中心に、家族、母娘などの人間関係を、ジェンダーの視点から検証する。

【授業計画】

第1回 オリエンテーション

第2回 こぼれとジェンダー

第3回 書く女の登場(1)

第4回 書く女の登場(2)

第5回 女性を描く男性作家のまなざし(1)

第6回 女性を描く男性作家のまなざし(2)

第7回 母と娘の物語(1)

第8回 母と娘の物語(2)

第9回 家族の物語

第10回 文学の政治性

第11回 文学と映像文化

第12回 まとめ

*内2回は山下智恵子担当。他は中島美幸担当。

【評価方法】

出席状況、毎回の感想、学期末のレポートを総合して評価する。

【テキスト】

なし。随時、プリントを配布する。

【参考文献・資料】

講義の中でその都度紹介する。

女性学・男性学

星が丘 長久手 前・後期 水・木曜2・3限

講師 / 中島美幸

【授業の概要】

男女についての定説化した知識、それによって作り出された役割、人格の内部に及ぶ性別化の影響とその結果生まれる病理などについて、さまざまな事例や理論を紹介し検討する。

【授業計画】

第1回 オリエンテーション

第2回 女性学・男性学の誕生

第3回 男女をめぐる国際比較

第4回 作られる「女らしさ」「男らしさ」

第5回 恋愛と結婚

第6回 リプロダクティブ・ヘルス/ライツ

第7回 女性と労働

第8回 男性と労働

第9回 家族をめぐる諸問題(1)

第10回 家族をめぐる諸問題(2)

第11回 将来展望・男女のライフスタイル

第12回 まとめ

【評価方法】

毎回の授業の感想と中間レポート(2~3回)の内容、

さらに学期末テストで総合的に評価する。

【テキスト】

なし。随時、プリントを配布する。

【参考文献・資料】

講義の中でその都度紹介する。

女性学・男性学

長久手 前期 集中

講師 / 竹信三恵子

【授業の概要】

男女についての定説化した知識やその内面化が日本の戦後の政策や働き方に及ぼした影響を、新聞記者としての取材の成果やマスメディアの検証から明らかにし、これらが生んだ社会病理をどう克服するかを考える。

【授業計画】

1. 戦後経済政策を男女分業はどう支えたか~高度経済成長からバブル崩壊まで
2. 日本の男女分業型経済と海外の動き~男女雇用機会均等法・男女共同参画社会基本法と「ワークライフバランス」
3. 男女分業型経済の浸透とマスメディアの役割~戦後経済政策の背景となった男女分業主義に新聞報道はどう関わったかを検証
4. 男女分業型経済の乗り越え~マスメディア報道からは見えにくい現実の男女関係の変化とこれに見合った新しい働き方の展望

【評価方法】

出席状況、授業後のフィードバックシートの提出状況と内容、授業内での質問や意見発表などの貢献度で評価する。

【テキスト】

『家事の値段』とは何か

(久場鳩子・竹信三恵子著 岩波ブックレット 1999年)

【参考文献・資料】

ジェンダーから見た新聞のうら~おもて~新聞女性学入門(田中和子・諸橋泰樹著 現代書館 1996年) ワークシェアリングの実像~雇用の分配が、分断か(竹信三恵子著 岩波書店 2002年)

比較文化論

長久手 後期 金曜3限

講師 / 星山幸子

【授業の概要】

国際化が進み、世界の異文化が日本に入り、日本の文化も世界に伝わるようになった。世界の文化の特徴をあげ、日本の文化との比較を考察しながら、異文化交流についても講義する。

とくに、イスラームの文化を事例として取り上げ、異文化に対する視点について検証する。この授業をとおして、多様な文化や価値観を学ぶことにより自分自身の社会や文化を見つめ直すことを目標とする。

【授業計画】

1. 文化と文明
2. 文化の理解
3. 民族と国家と文化
4. 南北問題と発展途上国の文化
5. 人の移動と異文化接触
6. グローバル化とローカル化
7. イスラームの文化
8. イスラームとジェンダー
9. 文化摩擦と国際問題
10. 中央アジアの人びと
11. トルコの人びとの暮らしと文化
12. 日本社会における異文化交流

【評価方法】

出席、授業中の提出物、討論と質疑応答 30%

期末試験 30%

期末レポート 40%

【テキスト】

テキストは使用しない。授業中に適宜プリントを配布する。

【参考文献・資料】

授業のなかで参考文献リストを配布する。また、ビデオなどの視聴覚資料を使用する。

これらの講座履修・申し込み先

愛知淑徳大学エクステンションセンター

〒464-8671 名古屋市中千種区桜が丘23

受付日時(月~金) 9:00~17:00

TEL/052-783-1665(直通) FAX/052-783-1621(直通)

ホームページアドレス <http://www.aasa.ac.jp>

編集後記

H16年度(2004)後期事業は、星が丘、長久手キャンパスに於いてセクシュアリティの多様性について考える、をテーマにしたセミナーを開催しました。改めて性の多様性について気がついたという参加者たちの数多い感想からこのセミナーの効果の大きさが伺えました。また、同セミナーの報告書も発行されました。こちらをN19号と併せてご購読ください。

- ASU・IGWS2004年度
- 運営委員：石田好江(所長兼)、岡澤和世、國信潤子、齋藤和志、西和久、平林美都子
- スタッフ：山田清美